わが半世紀は北海道
―反芻自戒は関東で―

北海道酪農大名誉教授　坂本　与市

私は能登島（現七尾市）生まれで農家の後継者として期待されていた。戦後食糧事情がやや落ち着いた頃、中仙道沿いに建つ国立の新制大学（旧高等農林）に入っていた。卒業も近い昭和29年9月26日、能登半島沖を通過した大型台風（通称＝洞爺丸台風）は、穂孕期を迎えていた海岸線の稲を直撃し、わが家の水田では一粒の籾も稔らなかった。その時点から私の進路は変更され、島の中学校教諭に就任して初任給9600円を得た。

島の方言で「アンサマ（安座様？）先生」と呼ばれることに忸怩たる思いはあった。その思いに上書きしたのが外部からの様々な誘惑である。その最たるものは「北海道は君を待つ！」という某学長からの葉書であった。教師生活3年目の春、意を決して北陸線を北上した。青函連絡船の乗客となったのは能登の桜が散って久しい5月。津軽の海は穏やかで、函館の山には残雪が輝いていた。ようやく辿り着いた札幌は大きな街で桜満開であった。「おゝ！、遠くからよく来たな！」学長は初面識の青年を、孫でも迎えるように歓迎の言葉。旅疲れに沈みがちだった胸に希望の灯火が再燃した。しかし、翌日からの仕事は農場の無給助手。早朝から牛舎の糞掻き掃除、居並ぶ牛の餌やりを済ませてから麦飯の朝食だ。日中はデントコーン畑でカルチベーター（五本爪の中耕・除草器）を曳く馬の水先案内役である。でも、思い直しては貧でも鈍しても希望だけは持ち続けたい。

やっと研究助手の席を与えられたのは畑仕事が終わって初雪を見る季節であった。それからも喜怒哀楽が続いて、学位が授与され教授に昇格したのは齢50も間近かであった。規定に則って学長選考委員長に選ばれ、一次、二次と選考段階が絞られていったが、やがてミイラ捕りがミイラになり第7代短期大学長に就任した。在京の初代学長は95歳、しばしば渡道してきては曰く「君、『七』という数字は不思議だね！」。爾来2期8年の任期を満了した。（現在は1期半まで）

学長職引退後は、○○機構理事長とか○○協会会長などと名誉雑役の任がやってくる。これらを10年ほど務めた頃から○○貢献賞とか○○功労賞ぜめとなる。いうなれば世間様からの肩叩きだ。長年、副理事長や副会長として支えてくれた方々への礼儀でもあろうから至極当然のなりゆきであろう。2011年5月、役職のすべてを辞任させてもらった。自分への喜寿の祝いでもある。北海道での半世紀、私の役割は全て終了したのである。

横浜は北海道から交通至近にある。求め得た小庵は高台に建つ五階の一角、富士と湘南の海を臨み、鎌倉文化やペリー来航の文明跡など、若干の喧騒はあるけれども、まあまあの環境である。冬場はここを根城に散策し、吾が半世紀を反芻し自戒のために綴りおきたい。夏場は北海道の涼風を吸うて、さらに落ち穂も拾い歩きたいものである。先日も能登から移転して百年という某派本山の古刹を訪ねた。「雲の行くごとく水の流れるごとく…」の雲水群像を拝謁できたが、自分もそうであるようにと感じ入った次第である。

（農学博士）

俳句　朝の珈琲

徳村　二郎
（俳人・無所属、内灘町）

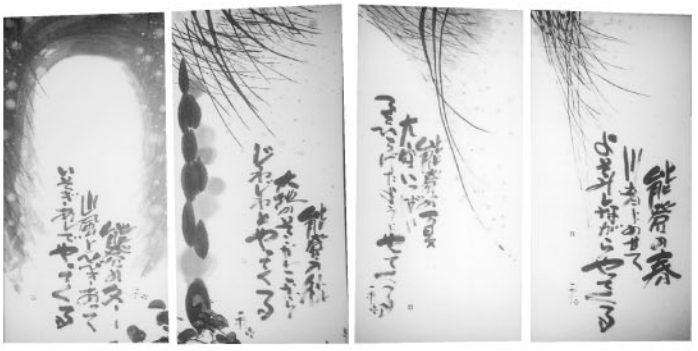
破魔矢持つ人に座席を譲られて
新日記師の金祝を祝ひけり
立春の朝の珈琲三杯目
鼓門木組みは春の日を受けて
春暁に聖母子像の仄白し
草餅の柔らかき買ふ父母命日
リラ冷えや老先生は休診す

屏風「能登の四季」

（右から春夏秋冬）

能登町大箱、抒情書家　室谷　一柊

昨年10月23日から11月23日まで金沢市広坂のしいのき迎賓館で開かれた「モダンジャパネスク展」から



事務局日誌（11）

8・1　「世界連邦石川」第45号発行
8・2　会費改訂・登録寄付理事に依頼、26件応募
9・16　執行理事会　平口理事長出席（衆議院第2議員会館）
9・30　海部俊樹会長（桐花大綬章受章）お祝いする集い　平口理事長出席（東京）
10・26　世界連邦推進小中学生ポスター・作文コンクール審査会（金沢市石浦神社）
10・28　世界連邦石川県連理事会　議題は秋の講演会ほか（金沢市香林坊アトリオ4階サロン）
11・13　第30回世界連邦日本大会　平口理事長、桑原理事出席（東京・政策研究大学院大学想海楼ホール）
11・19　石川県連秋の講演会。講師は伴武澄氏。ポスター・作文コンクール表彰式も（金沢エクセルホテル東急5階）
11・10～23　ポスター・作文コンクール　石川県内優秀作品展示（香林坊アトリオ2階）
12・9　執行理事会　平口理事長出席（衆議院第2議員会館）

編集後記

年1回開く世界連邦石川県連の秋の講演会は、今回120人の会員や一般市民が参加して盛況であった。この種の会合は直接的なメリットがあるわけでなく、全国的に低調傾向にあるらしい。軽薄な現代世相を映しているかに見える。会員をもっと増強し、後世につないでいきたい気持ちが山々である。関東大震災と東日本大震災を睨んでの問題点を指摘された伴武澄氏の講演要旨をじっくり噛みしめてほしい。（S）